

金融経済の観点から捉えたスローマネー

林 公 則

Slow Money from the Point of View of Financial Problems

Abstract

Slow money proposed by W. Tasch is spreading around the United States. This effort is financially support to the small organic food enterprises. Slow money as a research object has been evaluated mainly in terms of investment in the region. However, in this paper, I clarify that the slow money contains rich contents besides the investment in the region. In order to clarify this, I examine the two Tasch's books in detail. Through this paper, it becomes clear that Tasch places financial problems at the root of various problems and he thinks that it is necessary to create a nurture capitalist who valued fertility of the soil more than anything else. And he insists on restorative economics that incorporates below principles; carrying capacity, cultural and biological diversity, sense of place, care of the commons, and nonviolence.

Keywords

Small Food Enterprises, Nurture Capital, Fertility of the Soil, Restorative Economics

I. 本稿の課題

スローマネーとは、ウッディ・タッシュ (Woody Tasch) によって提唱された取り組みで、2008年1月に最初の集会在催されて以来、米国を中心に広がりを見せている。2017年10月に出版された著書では、スローマネーの取り組みを通じて2009年以降に600を超える小規模有機食品事業 (スローフードで推奨されるような事業) に対して5700万ドル以上の資金が供給されたと記されている (W. Tasch・2017 p. VII)。スローマネー協会のホームページには、最新の数値としてこれまでに752の小規模食品事業に対して7300万ドルが投資されたと記されている。また米国内では27つのローカルグループがスローマネーの取り組みを実施しており、オーストリア、カナダ、フランスにも広がっている

(Slow Money Institute の Website)。

研究対象としてのスローマネーは、これまで地域 (Local) への投資という点から主に評価されてきた。ロカベスティング (Locavesting) という造語をつくったエイミー・コルテセ (A. Cortese・2011 pp. 147-158) やその著書を紹介した松尾の論文 (松尾・2016) がその代表と言える。また、マイケル・シューマンも同様の観点からスローマネーを評価している (M. Shuman・2012 pp. 90-91)。たしかにタッシュは、スローマネー原則 (資料1) の最後の部分で、「資産の50%を、私たちが住む場所から50マイル (約80 km) 以内で投資するようにしたら世界はどうなるだろうか」と述べている。しかし、「利潤の50%を寄付する新しいタイプの会社があったらどうなるだろうか。今から50年後に私たちの土壌に有機物が50%多く存在するようになればどうなるだろうか」と文章が続く

ことから明らかなように、スローマネーの射程は地域への投資に留まらない。

先行研究で指摘されてきた地域という視点が重要であることを踏まえつつ、本稿では、地域への投資という以外にもスローマネーには豊かな内容が含まれていることを明らかにしたい。このことを明らかにするために、タッシュの2冊の著書(W. Tasch・2008, W. Tasch・2017)を詳細に検討する。スローマネーの取り組みは、2008年に出版されたタッシュの著書の内容が発表・議論され、その考えに数百、数千の人々が魅了されたことで始まった。そして、その考えを10年経って示し直したものが2017年の著書になる。後述するように、スローマネーとは実践が先行していてそれを理論化したものではなく、タッシュの思想に触発されて、それに共感した人々が実践を始めたという取り組みである¹⁾。この意味でも、タッシュの2冊の著書の内容を詳細に読み解くことには重要な意義がある。

スローマネーの実践が始まって10年ほどになる。初期の実践の経緯については本稿で簡単に取り上げるが、それ以降、それぞれのローカルグループが各地で多様な取り組みをしている。これまでに3号出されているスローマネージャーナルでは、農業者などからの現地報告や投資先の事業の内容(投資額含む)などが紹介されている(Slow Money Institute・2016, 2017, 2018)。ただし、本稿ではスローマネーの具体的な実践にではなく、スローマネーの考え方に主に焦点を当てたい。

II. 金融経済の問題点

小規模有機食品関連事業への投資は、高コスト(要求される信用の額に比して情報収集の手間やコストがかかりすぎる)かつ高リスク(天災や市場動向による価格の乱高下などによって生じる貸倒れリスクが存在する)である。スローマネーは、金融排除されやすい小規模有機食品関連事業を支えようとする取り組みである。スローマネーには農業と金融の側面があるが、元来タッシュは金融業界の人間であった。

スローマネーの考え方を発表したとき、タッ

シュは投資家サークル、エンジェル投資家の非営利ネットワーク、ベンチャーキャピタリストや財団に関わっており、1992年以来、維持可能な社会を目指すベンチャー企業などに資金を提供してきたという実績を有していた(W. Tasch・2008)。タッシュが最初の著書を出版した2008年といえば、世界金融危機の真ただ中で、既存の金融システムの問題点が顕在化しつつあった時期である。

ときおり具体的な数値を紹介しながら議論を進めるのが、タッシュの特徴である。「ニューヨーク株式市場の取引高は、1960年には一日300万株だった。それが1982年には1億株に、1997年には10億株に、2001年には20億株に、そして2007年には50億株になった。ウォールストリートの取引仲介業者全体の収入は、1980年の200億ドルから2000年の3250億ドルに増加した」(W. Tasch・2008 p. 13)。そして別の箇所では、全企業利潤に対する金融部門から生じた企業利潤の割合が1960年の7%から今日30%まで上がった反面で、製造業部門から生じた利潤の割合は50%から25%に下がったと述べている(W. Tasch・2017 p. 25)。さらに、米国の消費者が食品に使った1ドルのうち、農家に落ちる額が1900年の40セントから今日7セントに減少していることを構造的な病気だと指摘している(W. Tasch・2017 p. 25)。すなわち、タッシュの指摘の第一は、実体経済に比して金融経済が肥大化している経済には、重大な問題が潜んでいるということである。

金融市場では1秒間に数十億回以上の指示をだせるコンピュータが導入され、信じられないスピードでの取引が可能になっている²⁾。そして、金融市場での過度のスピードとヘッジファンドのCEOや投資家の短期利益志向とによって、大きな混乱がもたらされているとタッシュは指摘する。すなわち、取引のスピードが増すほどに、利益以外の具体的なことは考慮されなくなっていき、自然や社会と金融との分断が大きくなっていくという。たとえば、水が土壌や帯水層を通して流れる時間と資金が投資信託やデリバティブを通して循環する時間との間の分断、土壌や石油が生成されるのに要する時間と

それらを使い果たすのに要する時間と時間の分断などがあげられている (W. Tasch・2008 pp. 15-16)。ここでタッシュが主張しているのは、自然のペースを尊重する新たな経済的な関係性を私たちは発見しなければならないということである (W. Tasch・2008 p. xi)。貨幣があまりに早く動くようになった結果、人々や場所から貨幣が分離し、専門家さえ金融を完全に理解できないようになってきているという (W. Tasch・2008 p. xix)。

金融を中心とする現在の経済に対するタッシュの第三の指摘は、金融市場が非道徳的だという点である。ジョージ・ソロスの言葉を借りながら、次のように述べている。「個々の投資家が結果に影響を与えることができないという点で、金融市場は非道徳的である。一方で、投資家は幸せなポジションにいる。なぜなら、投資家はモラルの問題を考えなくて済むからである」(W. Tasch・2008 pp. 88-89)。利潤最大化もしくは効用最大化を個々人が追求することによって社会全体の最大幸福が実現されるという経済学のパラダイムに対する批判がここには含まれている。また後述するように、常に経済成長が求められる現在の経済のあり方にもタッシュは疑問を持っている。

タッシュは2017年の著書でも、技術と金融の役割を見直し、20世紀の優先事項、すなわちグローバルな市場を強化すること、都市の成長、農業の工業化、すべてのものをコンピュータ管理すること、そしてすべてのものをスピードアップすることを、21世紀には変えていかなければならないと述べている (W. Tasch・2017 pp. 24-25)。

タッシュは、上記のような金融経済を重視する経済のあり方が、農業にも多大な悪影響を与えてきたと考える。では、タッシュが主に米国で展開されている農業を念頭に置きながら問題だと考えていることについて、次節でまとめることにする。

Ⅲ. 近代農業の問題点

戦後、工業との生産性格差是正のために農業

の大規模化・近代化が進められた。タッシュは次のような数値を紹介している。「1900年には世界の都市人口は2億2000万人(13%)だった。それが1950年には7億3200万人(29%)、2007年には33億人(50%)になり、2050年までに66億人(66%)に達すると見込まれている。米国では今日85%が都市部に住んでいて、それと並行して農業の工業化が広がっている」(W. Tasch・2017 p. 80)。そして、「1950年に2500万人いた米国の農家は、200万人ほどに減少した。16万3000の巨大農場があるが、米国の食べ物の60%がそこで生産されている」(W. Tasch・2008 p. 17)という事実に触れる。米国では農業に工業の原理が他国にも増して導入されており、少数の巨大農場が食料供給を支えるという形になっている。このような食や農をめぐるあり方をタッシュが批判するのは、それが維持可能ではないからである。

植物の育成に欠かせない肥沃な表土は、1000年で25~50 mmしか生成されない。にもかかわらず、肥沃さを維持するよりも短期的な収量を重視する近代農業によって、40年も経たずに肥沃な土壌が25 mm失われたとタッシュは指摘する。さらに、世界の農地の約1/3が第二次世界大戦後に劣化していて、いまでも耕作可能な土地の1%が毎年侵食で失われていると述べ、土壌侵食を農業における暴力の一形態と位置付けている (W. Tasch・2008 p. xiii)。

土壌侵食を引き起こしている原因としてタッシュがあげているのが、化学肥料の使用である。タッシュによれば、第二次世界大戦後に軍需産業から転用された化学肥料は、短期的な収量をあげた反面で、微生物への有害な効果のために腐敗を妨げるようになり腐植土の生成に致命的な影響を与えることになったという (W. Tasch・2008 p. xiv)。

また、農業の近代化が進むにつれて安価な石油に依存した高(多)資源投入型大規模農業が広がり、遠方の市場に農産物を運ぶための長距離輸送システムが整備されるようになった。その結果、米国の温室効果ガスの20%以上が農業由来であるという。農薬や化学肥料による汚染、生物多様性の喪失も生じており、同時に食物の

栄養や安全、地方経済の衰退、投機によるグローバル市場での農産物価格の不安定などの問題も起きている (W. Tasch・2008 pp. xiv-xv)。

維持可能な社会を実現するためには、農業の近代化以降に激減してきた小規模有機農家の増加が欠かせないとタッシュは考える。しかし、前述したように、現在の食料供給システムでは食品1ドルのうち、農家が受け取れるのは7セントにすぎない。しかも、この食料供給システムでは、1カロリーの食品をつくるために石油エネルギーを57カロリーも消費するという (W. Tasch・2008 pp. xv-xvi)。地球環境の維持可能性の観点からみれば非合理的なシステムになっているのは、このシステムがグローバルな金融市場を意識してつくられていて、そこでは投資家が、目前の収量が最大になるような農業に、すなわち企業的な大規模農家に資本を投下しているからだとしてタッシュは考えている (W. Tasch・2008 p. xvi)。

それゆえ、タッシュは、土壌の肥沃さ、生物多様性、食品の質、地域経済が直面している問題は、技術の問題ではなく、金融の問題であると考え。大規模で中央集権的な生産を導く19世紀の考え方を改め、数十億の人々の生活を改善するためには、小規模の取り組みを長期的に支える投資が必要だということを理解しなければならないという (W. Tasch・2008 pp. xvi-xvii)。そのために必要なのがスローマネーである。

スローマネーの詳細な内容に入る前に、スローマネーが金融に関する従来までのさまざまな取り組みとどのように異なるのかを次節で明らかにしておきたい。

Ⅳ. 従来までの金融との違い

スローマネーでは、小規模有機食品関連事業体への資金供給が中心となる。しかし、小規模有機食品関連事業体は投資先としては非常に小規模で、個別の投資先としては貸倒れリスクが高すぎるという問題がある。ベンチャーキャピタルでは、多数の中小企業への投資をポート

フォリオとして一つの投資先とみなすことで、この問題が解消されている。事業の多くが失敗したとしても、ごくわずかの企業が莫大な利益をあげさえすれば、全体として投資家は利益を得ることができる。

タッシュは以下の理由で、スローマネーはベンチャーキャピタルの手法を採りえないとしている。ベンチャーキャピタルでは、ポートフォリオ全体の利益が、ごく少数の勝者によって生み出される。そのほかの多くの中小企業は生き残らない。地球環境の維持を考慮したときに必要だとタッシュが考える小規模有機食品関連事業体の多くが事業を続けられないことが問題であるし、同時に、小規模有機食品関連事業体が莫大な利益を生み出すことは考えにくいし、莫大な利益を生み出して大規模化すること自体、タッシュにとっては望ましいことではない (W. Tasch・2008 p. 62)。それゆえ、中小企業への投資という点ではベンチャーキャピタルと同様であるが、スローマネーには独自の手法が必要であった。

米国では、この数十年で、ベンチャーキャピタルだけでなく、社会的投資やフィランソロピーでも多大な量的成長を収めてきた。しかし、タッシュは、社会的投資やフィランソロピーには大きな問題があるという。フィランソロピーのために寄付される資金を生み出す財団の資産は、多くの場合、財団のミッションとは関係のない投資先で運用されている。たとえば、世界最大の財団であるビル&メリンダ・ゲイツ財団が近隣の住民に健康被害を生じさせるナイジェリアでの石油掘削事業で財団の資産を運用していたことが明らかになっている (W. Tasch・2008 p. 70)。

タッシュによると、同様の問題が社会的投資にも見られるという。元来の社会的投資は、アパルトヘイトを継続する南アフリカ共和国への進出企業の株式売却といったように、経済における非暴力の表現だった。しかし、社会的投資の考え方が広まり、多くの投資家が社会的投資に賛同するようになるにつれて、社会的投資にも金銭的な配当が求められるようになっていった。その結果、フォーチュン500に掲載される

会社の90%が社会的投資のポートフォリオにも入るようになったという。つまり、通常のファンドと同程度の配当を要求されたことにより、不可避免的にスクリーニングが弱まったという批判が社会的投資にはなされている（W. Tasch・2008 pp. 44-47）。たとえば、取締役会に女性やマイノリティがいるという理由で、多くの社会的投資のポートフォリオには、ウォルマートやマクドナルドや石油会社といった企業が含まれている。社会的投資やフィランソロピーの分野で起きていることは、より深刻な問題に対する不十分な対応を認めることだとタッチュは考えている（W. Tasch・2008 p. 130）。

維持可能な社会を目標として取り組まれてきた上記の金融が不十分な結果になっている理由を、投資において利益をあげることが強く求められていること、違う言い方をすれば、経済成長を強制されていることだとタッチュは考えている。土壌汚染、都市の荒廃、スプロール化、環境汚染、喫煙に関連した病気、肥満、児童労働などは経済システムの副作用などではなく、経済成長に伴う本質的な病気であるというのがタッチュの考えである（W. Tasch・2008 pp. 130-131）。

成長の強制は、混乱や尽きることのない不満足な消費者需要を作り出す。このような状態は経済的な暴力の一形態を成す。それゆえ、タッチュは、平和な市場、平和な企業が報いられる市場が必要だと述べている（W. Tasch・2008 p. 136）。タッチュは次のように述べている。「成長を最大化するのではなく暴力を減らすことが、人間の幸福を高めることを真に志向する経済の主要な目的になるだろう」（W. Tasch・2008 p. 185）。

このように考えたタッチュが、社会的投資、フィランソロピー、ベンチャーキャピタルとは異なる考え方で提唱したのがスローマネーになる。

V. スローマネーと育成資本家

2節で述べたように、現代の金融は巨大に、そして過剰なスピードになっている。このよう

な速い資金は、経済規模が小さく環境への負荷が小さい時代において意味があった。しかし、産業革命とそれを支える工業のための金融のルールと目的は、地球環境の維持が重要な課題となっている現代に合わなくなっているという（W. Tasch・2008 pp. 101-102）。

産業革命以降の経済発展のなかで、モノやサービスの量が劇的に増加した一方で、地球環境の破壊をはじめとするさまざまな問題が生じるようになった。工業のための金融は、本質的に生態学的地域やコミュニティの長期的な健全さを育成する能力を制限する。そして、これらの制限は、食品の分野においてどこよりも明確に現れる。すなわち、資金を投資家が最も効率的に運用しようとすれば、化学物質を多く含んだ安価な食品、何百万エーカーの遺伝子組み換えトウモロコシ畑、数兆に上るフードマイルズ、土壌の肥沃さの低下という結果につながる。このような状況のなかで、生態学的地域やコミュニティから分離した経済学の不完全性、場所から切り離された市場の不完全性、そして健康とのつながりを失った富の不完全性に関する総体的な見方が生まれてきたという。タッチュは、いまが経済的・文化的な移行期だと考えており、その成功を図る主な指標の一つが、土壌の肥沃さに敬意を払い、保護し、育成しながら経済活動を行う事業体に資金をどれだけ供給できるかであると述べている。タッチュが経済の基礎だと考え、最も重視しているのは、土壌の肥沃さである（W. Tasch・2008 pp. 5-7）。

工業が非生命を扱うのに対して、農業は生命を扱う。そこに両者の重大な差異がある。工業で安定を得るためには徹底して科学的に管理する必要がある。一方で、自然や農業において安定を実現する唯一の原理は、成長と腐敗の間のバランスをとることだとタッチュは指摘する。ただし、バランスは静的なものではなく、決して完全には達成されない。そして、自然とは異なり、農業の場合には正しい手段によって意識的に誕生、成長、成熟、死、腐敗のサイクルを繰り返させる必要がある。しかし、これまでの経済活動は、農業も含めて、サイクルをうまく実現させるよりも、短期の生産性向上を優先さ

せてきた (W. Tasch・2017 pp. 33-34)。

米国では有機食品市場やロハス市場の急激な成長とともに商業的な成功を収めた当初は小規模だった社会的企業がいくつもある (Ben & Jerry's、Aveda、Stonyfield など)。また Whole Foods Market も急拡大してきた。しかし、タッシュは次のような論点が十分に議論されないままだと指摘する。企業が株式を公開したり買収されたりしたとき、その企業の当初のミッションは不可避免的に損なわれてしまうのではないか。企業の規模が大きくなったとき、地域に何が生じるか。もし何万もの小規模で独立したミッション優先の事業体が地域における制御を優先した資金によって支援されたら、食料システム、特に経済は全体としてより安全でより健全になるだろうか (W. Tasch・2008 p. 99)。

上記の論点を深く考慮しないまま有機食品事業体に投資している投資家を、有機肥料を購入し外部から投入したり化学物質を利用しない害虫駆除を行ったりしている有機農家のような者で、堆肥化や土壌の健康さの神秘を知らない者だと、タッシュは批判する。その結果、有機食品が食品店の棚に並ぶようになる一方で、地域の土壌は肥沃さに欠け、生命も不十分で、将来世代を支えることが困難なままになっているのが、タッシュの理解である (W. Tasch・2008 p. 100)。

上記の理解に基づいて提唱されたのがスローマネーで、スローマネーを利用する人々をタッシュは育成資本家 (nurture capitalist) と名付けた。詳しくはスローマネー原則 (資料1) をご覧いただきたいが、一言で言えば、スローマネーとは食物と土壌と資金との間の新しいつながりを目指すものである。一方、育成資本とは、地域の個人から、土壌やコミュニティの健康を維持・回復しているビジネスへと向かう資金である。

スローマネーは、ベンチャー資本家のためのものではない。そして、社会的責任を有したベンチャー企業を支援しようというタイプの資本家のためのものでさえない。これまでには存在しなかった考え方を有する育成資本家のためのものである (W. Tasch・2008 p. 103)。タッ

資料1 スローマネー原則

食料安全保障、食の安全、そして食へのアクセスを改善するために、栄養価や健康を改善するために、文化的・生態学的・経済的多様性を促すために、そして採取や消費に基礎をおいた経済から保全や回復に基礎をおいた経済への移行を加速するために、私たちは署名によって以下の原則に賛同する。

- I. 私たちはお金を現実に戻さなければならない (bring money back down to earth)。
- II. 貨幣はあまりに速く、企業はあまりに巨大に、金融はあまりに複雑になった。したがって、私たちは貨幣を遅くしなければならない。もちろんそれがすべてではないが、十分重要的なことである。
- III. 20世紀は「安く買って高く売る」、「まず資産を成し、その後慈善活動をする」という時代だった。このことをあるベンチャー資本家は、「歴史上最大の財産の蓄積」と呼んだ。21世紀は育成資本の時代になるだろうし、環境容量の原則に基づくようになるだろうし、コモンズ、場所の意味、非暴力を気遣うようになるだろう。
- IV. 私たちは、食品、農場そして肥沃さが重要であるかのように投資することを学ばなければならない。私たちは、生き生きとした関係や小規模食品事業体に対する新たな資金源を創り出しながら、投資家を彼・彼女らが生活している場所とつなげる必要がある。
- V. さあ、殺すこと (Making a Killing) から生計を立てること (Making a Living) への道を示している新しい世代の起業家、消費者、投資家を祝おう。
- VI. ポール・ニューマンは、「私たちは人生において、取り出したものを土壌に戻す農民のようなものでなければならないのではないかと考えていた」と言った。これらの言葉に含まれる英知を認識しながら、そして、以下の点を問いながら、「下から」経済を立て直し始めよう
 - ・資産の50%を、私たちが住む場所から50マイル (約80 km) 以内で投資するようにしたら世界はようになるだろうか
 - ・利潤の50%を寄付する新しいタイプの会社があったらようになるだろうか
 - ・今から50年後に私たちの土壌に有機物が50%多く存在するようになればようになるだろうか

スローマネー原則に署名するには、以下へ進もう。
www.slowmoneyalliance.org

ッシュは次のような人々を育成資本家だと考えていた。従来までの投資家 (原典では開発者) の基準が効率、数、量であるのに対して、育成資本家 (原典では育成家) の基準は、個性、質、ケア、優しさである。従来までの投資家の目的が利潤であるのに対して、育成資本家の目的は健康 (土地、自身、家族、コミュニティ、国の健康) である (W. Tasch・2008 pp. 103-104)。

小規模有機食品事業体を重視し、そのような事業体を地域で支えることを重視していたタッ

シュは、育成資本家になるべき主体を地域に住する小規模投資家だと考えていた。社会的投資の投資家は、非常に多数の小規模投資家である。しかし前述したように、社会的投資家の多くがスクリーニングの形骸化に不満を持っているとタッチは考える。その点、健全な地域の食料システムの価値を正しく評価する個々の投資家にとって、スローマネーは直接的・具体的な投資先を提供することができる。なお、タッチは同じ箇所で、個人からの寄付を利用することがスローマネーの実践の一部として必要になるかもしれないと述べている（W. Tasch・2008 p. 112）。

タッチは三つのヨーグルト企業を具体例としてあげながら、育成資本家が規模の問題を考慮しないことはありえないと述べている。以下で要点を紹介したい（W. Tasch・2017 pp. 92-93）。

第一のヨーグルト企業は、10年間で10億ドル以上を売り上げ、世界最大のヨーグルト製造工場を建てることを目指している。この工場では、毎日1100万ポンドの牛乳を加工できるという。有機ではないものの、原料の牛乳には成長ホルモンを使用していないものを選んでいく。有機の牛乳を使わないのは、供給が不十分なためだという。この企業では、アニマルウェルフェアを取り入れている。ただし、牛乳の供給先の条件に「地域（local）」という単語が出てくるが、地域の酪農場にどのくらいの乳牛がいるのか（何十、何百、何千なのか）や乳牛が牧草地にどの程度アクセスできるのかについては情報がない。

第二は、非営利の農村の教育センターから米国を代表する有機ヨーグルト企業に成長した企業である。その企業は、有機という原則を守りながら30年間で数千万ドルから約4億ドルまで売上高を伸ばした。

第三は、450エーカーの農場からできるだけ多くの有機ヨーグルトをつくっている家族経営の企業である。この企業は外部からの投入を農場にほとんどせず、45頭のジャージー牛をどの農場よりも有機的に、維持可能的に、再生的に、栄養的に取り扱っている。この企業は、農場か

ら生み出せる牛乳の量に限りがあるため、数十年にわたって、年におよそ100万ドルという売上の限界に直面している。

利潤最大化を目指す投資家は第一のヨーグルト企業を、有機に関心をもっている社会的投資家は第二のヨーグルト企業を選ぶとタッチは言う。それらに対し、第三のヨーグルト企業に資金を供給するのが育成資本家である。

投資の専門家にとって、売上が100万ドル程度のヨーグルト企業は、投資先の候補にすらあがらない。なぜならあまりに小規模で、経営が夫婦に依っているという点でありに特異的で、しかも買収したとしても、この企業を転売できるほど事業を拡大する方法がないからである。一方、第三のヨーグルト企業のような事業体の流通の範囲内で生活している少額を扱う多数の育成資本家は、消費者以上の存在であり、企業にとって寛大なパートナーであり、小規模さや独立性を保ったうえでの繁栄を支援できる（W. Tasch・2017 p. 93）。

上記から明らかなように、タッチは、少数の投資家の資産を運用する主体（金融機関）を新たにつくるのではなく、少額投資家、農産物生産者、消費者の能力を高めると同時にそれぞれにメリットを提供できる常設の仲介機関をつくるのがスローマネーの実践では重要だと考えていた（W. Tasch・2008 p. 109）。次節では、スローマネーが実践においてどのような形をとっているのかを述べていく。

VI. 実践の形

スローマネーの取り組みは、スローマネーに関する集会を2008年1月にタッチが開催したことに端を発している。2008年10月にスローマネーに関する最初の著書を発刊した翌月、55人の個人と2つの財団からの資金提供によって非営利団体であるスローマネー協会が設立されている。

タッチは、金融の中心地であるウォールストリート取引所と対比する形で、メインストリート取引所が新しい経済には必要になると述べている。メインストリート取引所の主要な目

的は利益や経済成長ではなく、企業と投資家をつなぐことである。小さな独立した地域の1万の企業が、そのような企業に投資したい何百万かの小さな投資家と出会うことができれば、コミュニティは生き生きとして文化も豊かになるとタッシュは考えていた (W. Tasch・2008 p. 138)。

著書でスローマネーの必要性を訴えていたものの、当初は自身では実践に移さなかった。タッシュの著書や講演で共感した少数のグループが、彼のアイデアを実践に移そうと独自に挑戦を続けていた。そのような状況のなか、2010年5月にノースカロライナ州で開催された講演を聞いて、タッシュの考え方に最も近い形でスローマネーの実践を始めたのが、スローマネー・ノースカロライナ (以下、SMNC) だった (C. Hewitt・2013 pp. 11-13)。

SMNC の特徴は、投資信託などの仲介機関を通さずに借り手と貸し手を直接結んだこと、そしてピアトゥピアの融資 (スローマネー) を初めて実現させたことである (C. Hewitt・2013 p. 13)。その上で、同じ町 (最低でも隣町) に住む借り手と貸し手を引き合わせることをSMNCは重視していた (C. Hewitt・2013 p. 28)。SMNC の重要な役割の一つが、イベント開催などを通じてのネットワークの形成である。コミュニティのためになる事業を始めたい人と資金的な支援をしたいと思っている人のリストを作成し、マッチングする。また、融資の際には、借り手と貸し手の間に入って証書をつくることもある (C. Hewitt・2013 pp. 106-109, p. 135)。

SMNC が実現したスローマネーの実例を一つだけ紹介する。

大学生だったアビは、アレルギーをもっていたため、グルテンが含まれていないパンを食べるようになっていた。しかしグルテンフリーのパンで美味しいものはなく、ほかの人も困っていることに気づいた。そして、新鮮で質が高く美味しいグルテンフリーのパンを、地域の食材を使ってつくるパン屋を始めたいという相談をSMNC にしていた (C. Hewitt・2013 p. 33)。アビは次のように語っていたという。「パン屋

を開いて経営することは、私にとっては大学院に行くことと同じなの」 (C. Hewitt・2013 p. xiii)。

一方、ジュリーとアンは無料のニューズペーパーの地域欄に掲載されていたスローマネーに関する記事を読んで、SMNC を利用して資金を提供したいと連絡をした。SMNC は三人を引き合わせ、アビはジュリーとアンに自分の計画を話した。二人ともアビの能力、人格、計画に興味をもち、ミキサーや商業用オープンに必要な資金を個人間融資 (融資期間や貸付利子 (2%がSMNC では相場だった) は相談によって決まる) した (C. Hewitt・2013 pp. 35-36)。アンは後に次のように語ったという。「私は叔母からちょっとした遺産を受け取りました。でも変動が激しい株式市場で運用するのは気乗りがしなかったので、金利が1%以下の譲渡可能な債券を買っていました。そんなとき、自分の住むコミュニティですばらしい商品を提供しようとしている賢くて希望に燃えている若者に融資ができると知り、完璧だと思いました」 (C. Hewitt・2013 p. 36)。

SMNC の場合のスローマネーは、互いに相手を知っている人同士の間でのピアトゥピアの融資である。貸し手は、資金が返済されない場合にどのような事態が生じるのかを考えておく必要がある。しかし、そのように知らせても、スローマネーの融資に関わりたい人がリストには多数並んでいるという。リスクに関して、資金提供者の一人は、「地域のビジネスを支援するという貢献は、個人での融資にともなう貸倒れリスクに勝ります」と述べている (C. Hewitt・2013 p. 121)。

SMNC の実践によって、2010年以降で、200人以上が300件を超える低利子融資や株式投資に関わり、ノースカロライナに存在する120の地域のそして有機の農家や食品事業体に、合計400万ドル以上の資金が提供された (Slow Money NC の Website)。

2015年には、タッシュが積極的に関与した実践である SOIL (Slow Opportunities for Investing Locally) がコロラド州で開始された。仕組みは次の通りである。まずSOILへの寄付

(100ドル以上)を募る。寄付の資金を元に、地域の農家や小規模食品起業家に対して無利子融資をする。融資の可否は、寄付者の多数決によって決定される(寄付額にかかわらず、一人一票)。2年間で33人と2つの投資クラブからの寄付があり、寄付総額は20万6000ドルになり(寄付額の範囲は100ドルから8万ドル)、無利子融資を可能にしている(W. Tasch・2017 pp. 120-123)。

スローマネーは取り組むグループによって異なる形態をとる。そのなかで寄付金を利用したSOILは、高コストかつ高リスクと一般に考えられている小規模有機食品関連事業に対しての無利子の資金提供を可能にする注目すべき実践の一つと言えるだろう。

VII. 新たな経済学の必要性

スローマネーには、地域を重視する視点が間違いなく含まれている。それを一言で言えば、環境、生物、文化、コミュニティといったものを含んだ場所と土壌の肥沃さに対するこだわりである。場所と土壌へのこだわりから導き出されているのが、地域の小規模有機食品事業体への資金提供になる。この意味で、スローマネーには、地域経済を活性化させること以上のものが含まれていることを理解しなければならない。

3節で述べたように、タッシュは近代農業が急拡大した原因を、工業の原理でデザインされた19世紀型の市場や金融もしくは経済学に求めている。それに対して、スローマネーは、より速く、より大きく、よりグローバルにという流れに対抗するための貨幣に関する新しい見方であり、匿名性が高い形で行われる金融取引の世界に対するオルタナティブでもあるとタッシュは考えている。中小の農家、それらの農家と提携する中小のビジネス、そしてそのコミュニティがより維持可能になる新しい資金戦略に向かう重要な一歩として、スローマネーは構想されている。

それゆえ、小規模であること、透明性が確保されていること、そして個人が主体になることが重視されている。先の2点についてはこれま

で関連することを述べてきたので、ここでは最後の点について深めていく。

複雑なグローバル経済がつくりあげられるなかで、数多くの小規模な個人的な活動が降伏させられてきたという意見にタッシュは賛同したうえで、信念や価値観、コミュニティや土地との関連を失った資金は、降伏の行動の一つであると述べている(W. Tasch・2008 p. 141)。そして、他人の言葉を借りているものの、現在の問題を巨大技術によって解決することは不可能で、解決には何百万もの小さな取り組みと節度が必要であると指摘している(W. Tasch・2008 p. xii)。そのうえで、「私たちが直面している事態は経済的な病気ではなく、文化的な病気の経済的な兆候である。私たちの問題は経済的な問題ではなく、私たちがどのように考えてどのように生きるかという問題である。解決策は経済学者や投資銀行家の手にあるのではなく、市場に資金を投入する各人の心の中にある」と述べている(W. Tasch・2008 p. 134)。

この点と関連して、タッシュは興味深い話題を提供している。イタリア人が家計の15%を食費に使っている一方で、米国人は7%以下であるというデータを出した後に、タッシュは「(食費に多額を割く)イタリア人はおろかなのだろうか。近代農業や食品技術の効率性を性格的に利用できないのだろうか。それともイタリア人は米国人と異なる価値づけを食品にしているのだろうか。食品に多額を割くせいでその他の商品に資金を回せないために、イタリア人の文化は凋落しているのだろうか」と問うている。そして、予算の問題(資金をどこに割くか)は、最終的には個人の優先順位の問題であると答えている(W. Tasch・2017 p. 137)。タッシュがスローマネーの利用者として想定している育成資本家とは、有機農業と地域の健康な食品から生じる経済的・社会的・環境的利益を認識し、個人の取り組みから社会を変えていこうとする人々である。

スローマネーの射程としてもう一点指摘しておきたいのは、この考え方には、経済の金融化への批判とともに、主流の経済学に対する強い批判が含まれていることである。タッシュは、

生物圏やコミュニティとつながりをもたない経済学、場所とつながりをもたない市場、健康とつながりをもたない富といったものの不完全さを認識する必要があると述べる一方で（W. Tasch・2008 p. 5）、回復の経済学（restorative economics）が今後は必要になると主張している。回復の経済学とは、質や人間関係を重視する経済学で、維持可能性、文化的・生物的多様性、場所の意味、コモンズのケア、非暴力といった原理が組み込まれた経済学である（W. Tasch・2008 p. 39）。また、回復の経済学は、搾取や消費や金銭的な富を抑え、保全、回復、健康をより重視するものだという（W. Tasch・2017 p. 141）。

以上、本稿ではスローマネーを主に金融経済との関連から分析してきた。スローマネーはSMNCをはじめとする多数の人々が共感し実践に移すほどの影響力をもっている。スローマネーが支持されたのは、タッシュの議論が包括的で本質的であったからであろう。資金の地産地消という観点からだけでなく、今後の経済もしくは経済学のあり方を指し示す考え方としてもスローマネーを評価していく必要がある。

*本研究は、JSPS 科研費（18H00619）「世界システムとオイコノミア」の助成を受けたものである。

注

- 1) タッシュの思想にはさまざまな視点が含まれているので、スローマネーの実践者によって重視する視点が異なっている。その結果、実践のあり方も多様である。たとえば、ライベルによると、資金提供の方法にも、本文で取り上げているピアトゥピアの融資のほかに、オンラインの融資プラットフォームや投資家のネットワークを利用するものがある（E. Leibel・2017 pp. 20-30）。また、受託者資本主義（fiduciary capitalism）という観点からスローマネーを捉えようとする論文が

発表されている（P. Jayashankar et al.・2015）。多様な解釈がとられつつある現段階において、タッシュの思想の本質部分を明らかにしておくことには意義がある。

- 2) 詳しくは、ルイス（2014）を参照されたい。

参考文献

- 松尾順介「ロカベスティングとスローマネー：資金の『地産地消』の取り組み」『証研レポート』2016年12月、1699号。
- マルケル・ルイス（渡会圭子・東江一紀訳）『フラッシュボーイズ』文藝春秋、2014年（*Flash Boys*, W Norton & Co Inc, 2014）。
- A. Cortese, *Locavesting*, John Wiley & Sons, 2011.
- C. P. Hewitt, *Financing Our Foodshed -Growing Local Food with Slow Money-*, new society publishers, 2013.
- E. Leibel, "Local Institutions and Heterogeneity in Emerging Fields: The Case of Slow Money", *Academy of Management Proceedings*, 08/2017, 2017, pp. 1-40.
- M. Shuman, *Local Dollars, Local Sense*, Chelsea Green Publishing 2012.
- P. Jayashankar & A. Ashta & M. Rasmussen, "Slow money in an age of fiduciary capitalism", *Ecological Economics*, Vol.116, 2015, pp. 322-329.
- Slow Money Institute, *Slow Money Journal*, Spring 2016, 2016.
- Slow Money Institute, *Slow Money Journal*, Winter 2016/2017, 2017.
- Slow Money Institute, *Slow Money Journal*, Winter 2017/2018, 2018.
- Slow Money Institute の Website (<https://slowmoney.org/local-groups>)（最終閲覧日：2019年9月22日）。
- Slow Money NC の Website (<https://slowmoneync.org/>)（最終閲覧日：2019年9月22日）。
- W. Tasch, *Inquiries into the nature of slow money*, Chelsea Green Publishing, 2008.
- W. Tasch, *2017 -Notes Towards the Theory and Practice of Nurture Capital-*, Chelsea Green Publishing, 2017.